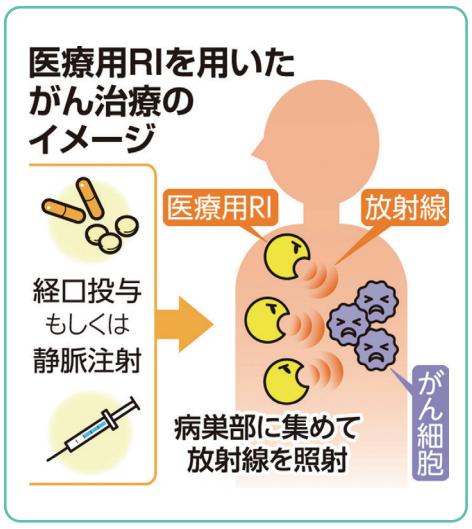
がんの次世代治療を推進！

がん治療は手術・抗がん剤・放射線の三本柱とされてきましたが、今、次世代の「核医学治療（内照射治療）」が注目されています。放射性医薬品を投与し病巣を狙い撃つこの技術は、多発・微小病変に強く、副作用等の負担も軽いため患者のＱＯＬ向上に大きく寄与します。国内でも供給体制の整備が進み、令和８年度からは高速実験炉「常陽」によるアクチニウム-２２５の製造実証も始まります。日本アイソトープ協会が立地する本県の優位性を活かし、県立がんセンターでの積極的な治療推進を訴えました。



出典：公明新聞より

県立がんセンターで核医学治療を拡充

県立がんセンターでは今年度、甲状腺がん等に約１４０件の核医学治療を実施し、実績は増加傾向にあります。希少がんである神経内分泌腫瘍への治療も年間約５０件と、全国屈指の規模を誇ります。

高齢化にともない低侵襲治療のニーズは高まります。技術導入や人材育成、施設整備など、県はがんセンターでの核医学治療の拡大を強力に支援します。

就職氷河期世代向けの就労支援を！

バブル崩壊後の厳しい雇用環境で就職活動を行った「就職氷河期世代」は、不安定な雇用や社会からの孤立、親の介護と仕事の両立といった深刻な課題を抱えています。低賃金による将来の年金受給額の低下や老後の生活困窮も懸念されており、問題は年々深刻化しています。

これまでの専門的な支援が「中高年の就労支援」に統合されたことで、以前のきめ細やかな支援の復活を求める声が寄せられていました。氷河期世代が地域社会の担い手として活躍することは、誰一人取り残さない社会の実現に不可欠です。

復活！「かながわジョブテラス」



神奈川県は令和８年度から「かながわジョブテラス」を再開します。ビジネスマナー研修や模擬面接などの伴走支援に加え、正社員求人限定の合同面接会を開催して企業とのマッチング機会を創出します。「就職氷河期世代」の方々が将来に希望を持ち社会で活躍できるよう、県として強力にサポートしてまいります。

運転免許試験にタブレット端末導入へ！

発達性ディスレクシアの方は、内容は理解していても試験問題の読解や記入が難しく、不合格になる事例があります。免許センターでも事前の申し出があれば、大きな文字の問題用紙を使用できますが、周知不足や申し出を躊躇されてしまうことが課題です。

そこで期待されるのがタブレット端末の導入です。文字拡大機能や読み上げ機能を活用すれば、読字の困難を和らげられるだけでなく、即時の合否判定やカンニング等の不正防止など、全受験者の利便性と業務効率化も期待できます。警察本部長からは「他県を参考に試作品を開発中であり、当事者等の意見を踏まえ検討を進める」との答弁がありました。



ディスレクシア：学習障害のひとつのタイプとされ、全体的な発達には遅れはないのに文字の読み書きに限定した困難があり、そのことによって学業不振が現れたり、二次的な学校不適応などが生じる疾患。